

## 第六十五回

# 静岡県保育研究大会

令和八年一月二十三日  
静岡市 グランシップ

令和八年一月二十三日静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)に於いて二〇二五年度静岡県保育研究大会が開催されました。第一分科会より第六分科会までの六分科会に分かれ発表が行われました。分科会への参加者三百三十六名、議長、助言者、記録者十八名、発表者十八名、運営委員・実行委員・応援職員約六十名の約四百四十名という規模で開催されました。当日は九時三十分から受付が始まり、十時より中ホールにおいて開会式が執り行われました。開会式では、静岡県保育連合会副会長の山田佳敬氏が開会のことばを述べ、続いて静岡県保育士会副会長の長澤真理氏が児童憲章を朗読しました。

その後、静岡県保育連合会会長の岡田泰稔氏が主催者挨拶を行い、来賓祝辞では、開催地を代表して静岡市こども未来局子育て教育政策監の萩原智美様、静岡県健康福祉部こども若者政策部長の赤堀健之様、静岡県社会福祉協議会常務理事の藤原学様より、それぞれご祝辞を頂戴しました。

開会式終了後は、九階・十階の各会場に分かれ、十一時か



ら十二時三十分まで研究発表が行われました。各分科会では、東部・中部・西部の発表者が日頃の保育実践をもとに研究発表がおこなわれました。発表は紙のレジュメだけでなく、パワーポイントや映像を効果的に活用した内容となっており、研究内容が大変分かりやすく伝えられていました。こうした発表からは、日頃の園内研修の積み重ねや職員間での情報共有に加え、保護者への説明責任を意識した取組が着実に進められていることがうかがえました。また、研究発表の手法についても工夫され、一歩進んだ内容となっていました。

昼食を挟み、午後一時三十分から再開し、ここからは、参加者からの質問に対する応答や、助言者の先生方からご考察・ご助言をいただく時間となり、午後三時三十分までの時間はあつという間に過ぎました。参加者一同、それぞれの実践を振り返りながら理解を深め、今後の保育につながる充実した学びを得ることができたと感じました。

再び中ホールに集合し、午後三時四十五分から閉会式が行なわれ、今年度千葉市で開催される第六十六回関東ブロック教育・保育研究大会へ派遣される議長および発表者の紹介が行われました。議長には、第三分科会の静岡市立有度西こども園・田中紫保先生、発表者には、第一分科会の裾野市御宿台こども園・奥脇尚美先生、辺見佳代先生、第四分科会の

掛川市こども広場あんり・鈴木宏美先生、天方利依子先生が紹介され、それぞれ大会に向けた抱負が述べられました。その後、大会宣言が採択され、二日間にわたる研究大会は盛会のうちに終了しました。

今大会を無事に終えることが出来たことは発表者、議長、助言者、記録者の皆様、運営に携わった皆様、そして各園の現場を支えてくださった関係者様等のお陰です。心より感謝申し上げます。



## 速報

### 第六十六回関東ブロック教育・保育研究大会 千葉市大会が開催

令和八年七月一日、二日の両日、千葉市において「第六十六回関東ブロック教育・保育研究大会 千葉市大会」が開催されました。

本大会には、関東ブロック一五都県市から九〇〇名以上の関係者が集い、盛大に執り行われました。

静岡県からは、先の「第六十五回静岡県保育研究大会」で選出された先生方が代表として登壇され、日頃の研究成果を堂々と発表されました。

その素晴らしい発表内容には、参加者からも極めて高い評価が寄せられました。

## 第一分科会

テーマ【組織力・チーム力向上のためのマネジメント】～施設内の環境づくり、

人材確保と育成・定着、施設長（管理者）の資質・変革等）

発表者 (一) 裾野市 御宿台こども園

主幹保育教諭

奥脇 尚美

(二) 静岡市 静岡市立原こども園

園長 岸端 宏美

(三) 菊川市 横地保育園

園長 鈴木 恭子

議長 浜松市 きなりこどもえん

園長 建部真貴子

助言者 常葉大学保育学部

教授 山本 睦

記録者 浜松市 きなりこどもえん

事務 天野 歩美

発表(一) 施設内の環境づくり・『当たり前』を見直す働き方改革

職員の多様な経験や価値観を踏まえ、「保育の当たり前」を見直し、保育の質向上を目指して働き方改革とチーム改革とチーム力向上に取り組んだ。ICT化による事務軽減、休暇取得や時間外労働削減を進め、保育者が子どもと向き合う時間を確保。さらに研修や他園視察を通じて共通理解を深め、現場主体

の改善を重ねた結果、専門性向上と働きやすい環境づくりにつながっている。

発表(二) 施設内の環境づくり、人材確保と育成・定着・施設長（管理者）の資質・変革等

不確実で複雑な時代において、管理者には人材を生かすマネジメント力が求められる。各園で職員アンケートを実施、結果を基にPDCAサイクルで改善を進めた。理念を共有し、得意分野を発揮できる体制づくりや相互理解を深める取り組みにより、組織の質向上を実感。子どもまんなかの教育・保育を支える持続可能な園運営を目指している。

発表(三) マネジメントサイクルの工夫による経営参画意識の醸成

本研究では、PDCAサイクルを活用したマネジメントの工夫により、職員の経営参画意識の醸成を図った。行事や活動の前後にアンケートを実施し、結果を基に話し合いと振り返りを行なうことで、小さな改善を継続的に積み重ねた。さらに業務の資格化やマニュアル化を進め、業務負担の軽減と主体的な参画を促し、組織力向上につなげた。

助言者より

三園の発表はいずれも各園の課題意識に根差した実践であり高く評価できる。地域の職

人や生活素材を取り入れた意見を重ねた取り組み、写真と記録を用いてこどもの姿を丁寧に読み取るドキュメンテーションの実践、目的や評価を明確にして職員間で振り返りを行いながら改善を進めた組織的な取り組みなど、多様な展開が見られた。実践は行うこと自体が目的ではなく、その意図や過程を言語化し共有することで研究的意義が高まる。特に写真の提示にとどまらず前後の文脈を示し、個と集団の双方の成長を捉える視点が重要であると助言された。



## 第二分科会

テーマ 【子育て支援・多機能化

～地域と連携した子育て、地域の

ニーズに応える施設づくり～】

発表者 (一)三島市 恵明保育園

園長 杉村 智恵

(二)静岡市 麻華こども園

園長 中原 美華

(三)浜松市 遊歩の丘

かみにしこども園

教頭 大瀬 尚代

議長 富士市 ひな保育園

園長 中川美智子

助言者 静岡福祉大学子ども学部

教授 永田恵実子

記録者 富士市 富士わかば保育園

園長 石川 美佳

発表(一) 地域と連携した伴走型子育て支援

～赤ちゃんセンターの実践を通して～

昭和二十七年に乳児院を出発点として児童福祉に取り組み、全国的にも珍しい複合施設を中心に事業を展開。赤ちゃん子育てのことは、よろず赤ちゃんセンターへ」をキャッチフレーズとして掲げている。園は、子どもを虐待から守り、命と安心・安全な暮らしを支える重要な社会資源であると考え、一人一人の子どもと家庭に寄り添い、成長を伴走する

子育て支援機関としての役割を大切にしながら、今後も地域や他園と力を合わせ、切れ目のない子育て支援を広げていきたい。

発表(二) ニーズに応える子育てサロンの工夫

広報の工夫とアンケートを実施して

地域の子育て世帯を対象に、子育てサロンを実施。子育てが孤立せず、親子が子育てを楽しめる場であり続けたいという思いから、広報方法や内容の見直しに取り組んだ。また、アンケートによるニーズ把握やパパサロンの実施など、利用者の声を生かした工夫や、安心して過ごせる場づくりにも力を入れてたことにより身近で参加のしやすさにつながった。今後は、地域のニーズに応じて出向くことや実施回数を増やすことも視野に入れ、安心感のある場を目指し、地域に愛される子育て支援を継続していきたい。

発表(三) 地域と連携した子育て、地域のニーズに応える施設づくり

～地域と連携し、ニーズに応えられる園を目指すためにできること～

子どもの発達に関する相談が減っているという課題があったため、親子広場利用者や在園児家庭が求めている支援を捉え直すため、〇・一歳児の保護者を対象とした「気軽にしゃべり会」やアンケートを実施。子育ての相談相手として身近な人よりもA Iを選ぶ保護者が増えていることや、子どもの育ちに対する困り感をあまり感じていない家庭が増えていることが分かった。園を地域資源の一つと捉え、地域の方が気軽に立ち寄り、安全な遊び場の提供や交流の場を通して、保護者が乳幼児との関わり方や子どもも理解を深められる機会につなげていきたい。

助言者より

近年、外国籍家庭の増加や子育て経験・知識が乏しいまま親になることや、低出生体重児など配慮を要する子どもの増加により、育児不安を抱える家庭が増えている一方で、支援が必要な家庭ほど支援につながっていない現状がある。支援の場は、安心して人とつながれる重要な拠点であり、人はやはり人と関わりたいという保護者の本質的なニーズを捉え同じ立場の親子が集い、遊び方や関わり方を具体的に学べる場として意義がある。また、父親は地域資源であると同時に子育てを支える重要な保育資源である。保育者の専門性や関わりの工夫と共に、時代に合った発信の良さを生かしつつ、誤解やハラズメントへの配慮を忘れず、子育て支援の機能化を実践へとつなげていくことへの期待が示された。



## 第三分科会

テーマ【子どもの育ちを保障する

関係機関とのネットワーク】

発表者 (一)熱海市 多賀こども園

園長 原田 昌徳

(二)吉田町 町立わかば保育園

園長補佐 大川原千尋

(三)浜松市太陽さぎのみやこども園

副園長 小倉真由美

議長 静岡市 市立有度西こども園

園長 田中紫保子

助言者 静岡大学教育学部

教授 石原 剛志

記録者 静岡市 市立長沼こども園

園長 前田 文乃

発表(一) 保幼小、虐待対応、療育、

地域等における連携

地域の保育・教育・医療などの専門機関との連携に着目し、円滑な協力体制について考えた。他園との交流活動で学区単位の関わりを深め、小学校とは架け橋カリキュラムや園長訪問等で子どもの育ちを繋いでいる。また、毎月十日の「RSTの日」(脱スクリーンタイムの日)の取り組みは保幼小中で定着している。発達支援では子どもの巡回相談や医療機関と連携し、継続的な自立支援を行っている。今後も各機関と園が、顔と顔を合わせて

情報を共有し、保幼小の連携の強化により、子どものより良い育ちを保障したい。

発表(二) 学びの切れ目のない

支援・接続を目指して

吉田町では、地域全体で子どもを支える「切れ目のない支援」を展開している。保健センター等の密な連携により、五歳児健診の導入やインクルーシブ保育の質の向上を推進している。また、小一プロブレム解消に向けカリキュラムを策定し、遊びを通じた主体的な学びの接続を強化している。さらに津波防災を町作りの基盤とし、小学校との合同訓練や津波警報時の避難所運営の反省から、多言語対応や備蓄改善など実践的な備えを深化させている。今後も連携を軸に、安心安全な保育環境の構築を目指していきたい。

発表(三) 「気になる子」への支援における関

係機関との連携の課題と改善策

近年、集団生活で困り感を抱えている児が増加する中、本園では関係機関との連携不足や保護者対応への不安が課題となっていた。調査の結果、保護者の療育への認識は期待から拒否感まで多様であり、保育者側も関係悪化を恐れ、適切な伝達に強い心理的負担を感じている実態が浮き彫りとなった。これらを踏まえ、支援フローチャートの作成やロールプレイ研修、組織的な対応を実施した。保育者が孤立せず相談できる体制を整えることで、支援の質の向上と、早期療育への円滑な

接続を今後も目指していきたい。

助言者より

小学校と園との連携のあり方は、小学校区内の園数、小学校の規模によっても異なる。また、公立の学校や園では人事異動もあり、各地域で、毎年顔の見える関係づくりを自覚的にすすめることが重要。公私をこえた連携で問題となるのは、誰が打ち合わせや会議を招集し、運営の責任を持つかということ。各地域・各年度でリーダーシップをだれがとるか考えていってほしい。並行通園が課題になっているが、保護者の意向のみならず、専門職として「子どもの最善の利益」の視点から考えていってほしい。なお

「気になる子」の理解には発達特性だけでなく虐待等の環境要因を把握することも重要であり、地域で連携して情報をつきあわせ子どもたちを見守ってほしい。



## 第四分科会

テーマ

【すべての子どもの育ちを支える保育の質の向上、家庭支援、保育のブラッシュアップ・充実した家庭支援、食に関する支援を考える】

発表者

(一)富士宮市 大中里こども園 主幹保育教諭 福島かおり

(二)静岡市 市立こども園葵一・二支部 市立中藁科こども園 園長 杉山 季子

(三)掛川市 こども広場あんり 保育教諭 佐藤 雅美

議長

磐田市 市立竜洋東こども園 園長 日向奈美恵

助言者

常葉大学保育学部 教授 柴田 賢一

記録者

磐田市 市立福田こども園 園長 榛葉 一恵

発表(一)

食へることは子どもの意欲を引き出すこと 食から見た人との関わり

会議で出る食事の課題から、発達過程をふまえた経験や関わりを探った。内容①食から見た人との関わりにおいては、乳児が安心して食事に向き合う場の設定や、声の掛け方を工夫した。幼児については、フローチャートを使って子どもの疑問や気付きに寄り添った。かぼちゃを育て収穫した後の『かぼちゃ

会議』の中では、調理方法やアレルギー問題等について、友達と話し合ったり、給食室と協力したりする体験を重ねた。②職員の資質向上については、自由画から見た振り返りと家庭支援を柱に研究を継続している。

発表(二) 地域の特産を知り家庭と共に進める食育活動から

地域の特産であるお茶を取り入れた食育活動を実践し食への関心を高めると共に、地域とのつながりの懸け橋となることを願った。

アンケート調査からは、家庭に急須が無い、準備片付けが面倒、カフェインへの配慮等の意見があった。この実態は職員も同様であり、茶摘み・クッキング・手もみ・お茶の入れ方教室の取り組みは、子どもや保護者だけでなく、園職員にとっても新しい学びとなった。

地域の協力や小中学校との連携により、文化や伝統に触れ、子どもの興味関心を育む保育が可能になる。今後も園の役割を考えたい。

発表(三) つぶやきから広がるこどもの育ち

地域の小中一貫教育からイェナプラン教育の考え方を学び、園の研究にも活かしている。①対話を大切にする、②日常的に異年齢で関わる、③体験を遊びや表現につなげる、ことを重視し、栽培体験に取り組んできた。

サツマイモの栽培体験では、つるさし・収穫、体験からの遊びについて、保育WEBを用いて振り返り、子どものつぶやきから育ちを探った。栽培体験を通じて、園と家庭、地

域が「子どもの育ち」という共通の目的でつながることを目指し、全ての子ども達を皆で見守れる、安心できる環境を作り上げたい。

助言者より

三園に共通しているのは『子どもの姿を尊重している、子どもの声が大事にされている』点である。食に関する活動は、日々の姿とのつながりの中にあるものであり、思想文化としての食の考え方が必要になってくる。様々な視点から子どもの育ちを振り返り今、子ども達に必要なこと、本当に経験すべきことは何かについて研究を通して考えてほしい。

「地域に開かれた園」を目指すが見える壁、見えない壁があるのが現状である。思い切って飛び込んでみる「ボーダー」を超えていく各園の試みに期待したい。



## 第五分科会

テーマ 【公立保育所・公立認定こども園等の

特性を生かした使命と地域社会での役割と発信】

発表者

(一) 函南町立西部保育園

園長 西澤 愛

(二) 島田市立第一保育園

園長 鈴木 陽子

(三) 浜松市立佐鳴台こども園

園長 清水 幸枝

議長

裾野市立東保育園

園長 小澤 晃子

助言者

静岡英和学院大学人間社会学部

教授 永倉みゆき

記録者

裾野市立深良保育園

園長 清野 昌代

発表(一) 幼児教育と小学校の円滑な接続について(架け橋期カリキュラム)

乳幼児の発達の連続性を大事にし、幼児期から小学校へ、園での経験を生かした緩やかなスタートができるよう架け橋期について考えた。函南町独自の乳幼児カリキュラムの見直しを行い、園内での横のつながりを深め、また、小学校の先生との保育参観、交流会の場を持ち、互いの良さと疑問等を話し合い、縦のつながりも深めることができた。架け橋コーディネーターの存在もあり、保育園と小

学校をつなぐ大きな存在となっている。保護者への発信においても更なる理解を深められるよう、わかりやすい発信を続けていきたい。

発表(二) ～私たちが今できること～

島田市は公立保育園が減少していく中でどのように地域に貢献していくかが求められてきた。「公立保育園の使命と役割」を改めて考えたり研修を受けたことで、公立保育園の果たすべき役割や職員としての使命が明確となった。今できることとして、職員の学習会を実施し発達支援と地域とのつながりを学んだり、民間保育園や地域型保育園との関係性を深めるために、合同研修会やイベント等を通して交流を深めていった。公立園・民間園・地域型園、どこの園に通っていても同じ島田の子。子どもたちの成長を一緒に喜び支え合えるより良い体制作りを目指していく。

発表(三) ―これからの人材確保と保育の資質向上に向けた人材育成―

人材確保については、職場体験や保育ボランティア活動、インターンシップなど、学生を積極的に受け入れをしたり、インスタグラムを開発し保育の魅力発信するなどの積極的な取り組みを、市が窓口となり行政をあげて行っている。

人材育成のためのOJTも重要な位置づけとし、計画的に研修を行った人材育成計画に基づきキャリアも明確になっている。また、現在働いているすべての職員が自分の能

力を生かして生き生きと働ける職場環境を整えることが大切。未来を担う子どもたちのために今できることに取り組んでいきたい。



助言者より

公立園とは地域の子育て支援の拠点であり少子化、民営化、保育士不足など厳しい状況ではあるが、多様なニーズへ対応していくことが公立保育所・公立こども園の役割である。

今後の公立園には、地域の保育の課題を先頭に立って担いつつ、私立園と連携しながら地域の保育を守っていく使命がある。

私たちの市はこんな環境でこんなに素敵な保育をしているんだと発信することも大切であり自治体がどのような保育の構想をもっているかも大きい。教育・福祉は効率では計れない。行政をどう動かすかも課題である。

## 第六分科会

テーマ【保育における人と人との関係性の向上】

発表者 (一)三島市 中郷南保育園

園長 瀬川 尊也

(二)静岡市 私立保育園園長会

保育内容検討委員会

若草保育園

園長 望月いづみ

(三)袋井市 子育てセンターにじいろ

保育教諭 寺田 智子

議長 静岡市 清水みらい保育園

園長 伊澤こずえ

助言者 静岡大学教育学部

教授 香野 毅

記録者 静岡市 ふたば保育園

園長 加藤 伸子

**発表(一) 他者の声を聴き、心情を汲み取ろうとすることから始まる対話の大切さについて考える**

コロナ禍を経て、ICT化が急速に進み、保護者と、対面で話す機会が減り関係が希薄になっていくのでは、という課題があった。聴く力(アクティブリスニング)と心情を読み取る力が大切だと感じている。

① ICT化で、保護者と共有した写真や動画を対話のきっかけにする。

② 短くても、質の高い対話「今日のきらり」で、子どものポジティブな姿を具体的に伝える。お迎え時の五分間面談を行う。保護者同士をつなぐパパ、ママ交流会(園長も参加)は参加率が高い。

**発表(二) 保育園ICT活用が拓く、新たな人間関係の可能性**

私立保育園こども園アンケートより

① 保育者間の関係 情報共有が効率化され、他クラスの実践を知る機会が増え、学び合う様子が見られている。

② 保護者との関係 父親や祖父母もアプリで園での様子が見られるようになり、送迎時に保育者と共通の話題ができる。

③ 子どもとの関係 時間の創出によって保育者の心の余裕が生まれ、子どもと丁寧に関わる時間が増えた。

**発表(三) 「じぶんできめる」子ども達の生活と遊び**

一斉の声かけやクラス保育を見直し、生活の中で自己決定のできる機会と自然に異年齢との関わりを増やす取り組み。コーナー遊びでは好きな遊びを選んで遊ぶ。給食はランチタイム制。子どもが食べたい時間に、ランチルームで、年少から年長までが混ざり合っ一緒に給食を食べる。食べる量も自分で決める。子どもたちは、ランチルーム開店の看板が出るのを楽しみにして「出たよ。行ってこよう。」と友だちと向かう姿がある。

**助言者より**

三つの発表とも今の園の状況が分かり、興味深かった。ランチタイム制の話は、自己選択、自己決定、生活の行為を子ども本人主体にしたことの意義が大きいと思う。保護者は、子どもが大変なときネガティブな感情を持つ。専門家として保育士は、保護者にアドバイスをしようにせず、よく聴くことが大切である。子どもの一つの遊びの場面を見ても、保育士と、保護者では、見る観点が相当に違う。あらわれだけを保護者に伝えるのではなく十分で、専門家としての立ち位置から子どもへの願い、考え、どんな意図で子どもに関わっているか、それらを保護者に説明する必要があると感じる。



# 県保育研究大会に参加して

## 第一分科会

子どもや子育て家庭への多様な支援が保育所・認定こども園等に求められるなか、安全、安心な保育の提供や保育の質を高めるため、組織マネジメントは職員の働きやすさややりがい直結し組織力・チーム力を向上させるために欠かせないと実感した中で、どの園の実践も、施設内の環境づくりからマネジメントサイクルの工夫による経営参画意識の醸成と、自園でも取り組みたい内容でした。

さらなる組織力・チーム力向上のため、保育内容や園の理念の共通理解や視察研修による視野の拡大、保育者も主体的に共主体と成長しあえる環境づくりなど成功体験を喜び合う内容が大切だと思いました。



今後も組織力・チーム力の、さらなる向上を自園でも努めていきたいと、強く感じました。

ブティット富士中央保育園 土橋 聖子

## 第二分科会

子育て支援・多機能化をテーマに、各発表園の地域のニーズに応じた取り組みを聞くことができました。自園でも、こども園としての専門性を生かした地域とのつながりを模索している中、各園の取り組みに学ぶことがたくさんありました。

時代の流れとともに保育の現場に求められる内容は多岐にわたります。今回の各地域での取り組みを参考に、今後も、在園家庭の支援にとどまらず、地域のニーズに寄り添いながら支援を進められるようアンテナを高く張りながら、地域の子ども・子育て家庭に向けたアプローチの工夫をしていけたらと思います。

永田先生の計らいで、ひとり一言発言する参加型の会となり、充実した時間となりました。

ブメハナリコエルアこども園

袋井 かほる

## 第三分科会

子どもの育ちを保障する関係機関とのネットワークについて重要であることは十分に認識していましたが、発表を聴講させて頂き児童福祉施設、教育機関等と密接に関わることでより良い支援につながるかと再認識することが出来ました。今後は子どもが無理なく成長していけるように積極的に連携を図っていききたいと思いました。

また、石原先生より虐待対応の取り組みについてとお話しがありましたが特別の事例を経験していないことから認識が足りなかったと思いました。いつどのような事が子どもに起きるかわからない現在、児童相談所等機関ともしっかりと繋がっていききたいと思いました。

東伊豆認定こども園 鈴木 匠



## 第四分科会

今回の研修を通して、子どもの育ちを支える食育の大切さを改めて実感しました。保育

園や地域、保護者が連携しながら体験を重ねることで、子どもたちが食への興味や感謝の気持ちをもたせていく過程がよく伝わってきた。特に、収穫体験やクッキングなどの実体験が、子どもたちの「やってみたい」という意欲につながっている点が印象的でした。また、保護者や地域を巻き込む工夫や、無理なく続けるための視点も学ぶことができ、日々の保育に生かしていけるものだと感じました。子ども達一人ひとりの姿を大切にしながら、食を通して心と体の成長を支えることが出来るような保育の実践をしていきたいと思っています。

島田聖母保育園 中根 美幸

## 第五分科会

公立園は行政の一機関として、福祉・教育・子育て支援などの行政の様々な機関と連携し、地域の核となつて、園同士や幼小をつなぐ役割を担っていることを改めて実感しました。



社会情勢や子育て環境の変化の中で、「こども園が次世代のために今できることは何か」を職員間で語り合い、現状を見直し職員で方向性を確認したり、試行錯誤しながら新しいことへ挑戦したりする姿勢に活力をもらいました。

各園の実践報告や小グループでの情報交換を通して、市町ごとの保育体制や課題の違いを実感しつつ、それぞれが工夫を重ね課題解決へ向き合おうとする取り組みにも多くの気づきと学びを得ることが出来ました。

県全体で教育・保育について語り合うことで、互いに支え合いながら学び合う意義を感じるとともに、自園における地域性や教育・保育についての良さや課題を新たに見つめ直す機会になった。

静岡市立上土こども園 井上 朋子

## 第六分科会

保育における人との関係性の向上  
～他者の声を聴き、心情を読み取ろうと



することから始まる対話の大切さに

ついて考える

今回の研修を聞かせて頂き、対面での会話の大切さを痛感しました。

コロナ化を経て、働き方改革の先陣としてICTの導入が進み、対面から文章での伝達に変わったことで、人間関係の希薄化がすすむのではという懸念もあったとの説明がありました。

デジタルの利用と、人間関係はアナログでその二つを有効につなぐことで、保護者、職員、子どもたちにとって、対面でも、文面でも自分の言葉がどのくらい届くのか、伝えるのは一緒、特別ではないと感じ、より良い活用法を見つけるきっかけになるのだとの助言もいただきました。

何より職員間でのコミュニケーション作りが大切であり、声を出して伝え合う会話の大切さが実感を深めていき、同じ目線での感動の共有、心の余裕と安定を図っていくことに繋がっていくのだと感じました。



新富町こども園 柴田 尋子